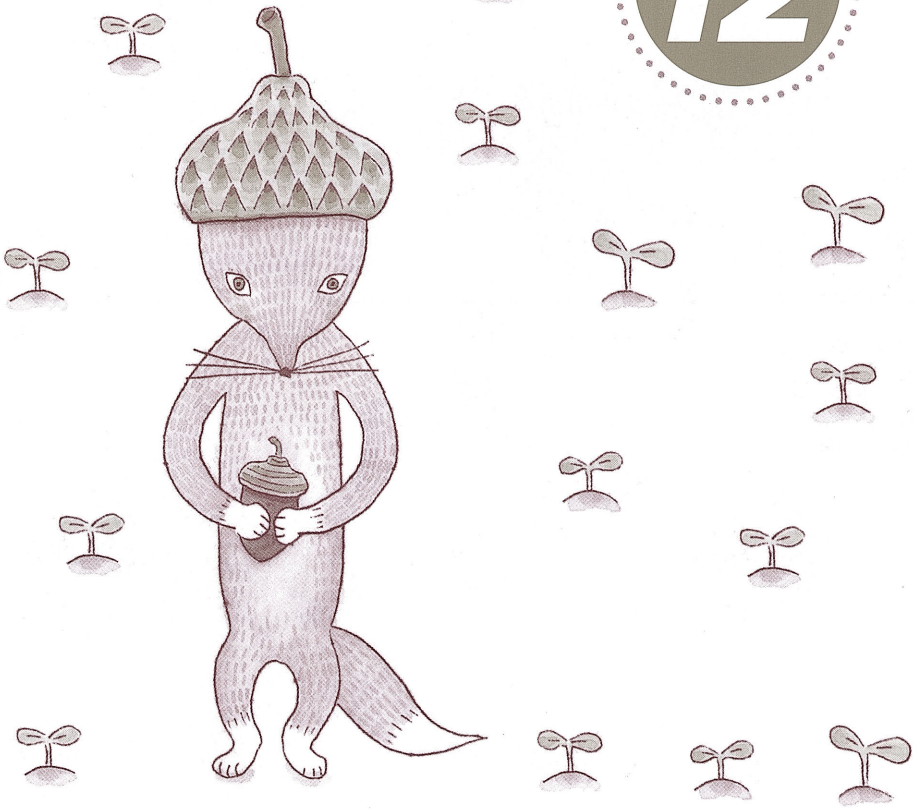
幼児の教育　第103巻　第12号　平成16年12月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2004

12



第１０３巻　第１２号　日本幼稚園協会

子どもたちとたくさん遊んだ
阿部先生オススメのパネルシアター

最新刊

阿部恵の パネルシアター ベストセレクション

阿部　恵　著

パネルシアターの第一人者、阿部恵先生のベストセレクション。子どもたちの反響が大きかった「ねずみのよめいり」「パンパンサンド」「ゆかいなゆかいなポケット」「いたずらおばけ」を収録。ちょっとした仕掛けや工夫が各作品に入っているので、子どもたちが喜ぶこと間違いなし！　演じ方や人形の作り方、型紙のほか、パネルシアターのポイントや各作品を実際に演じたときのエピソードも掲載しています。

AB判　80頁　定価2,310円（税込）

◀「ねずみのよめいり」より

▼「いたずらおばけ」より

■本書の内容から

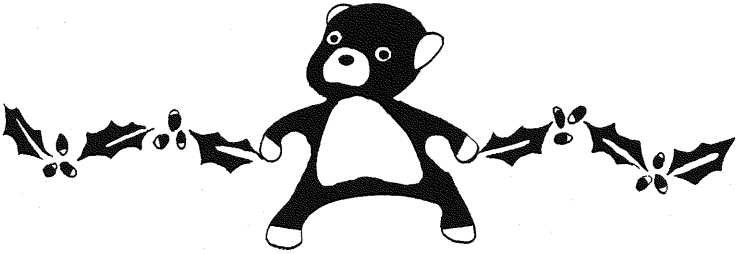
ねずみのよめいり／パンパンサンド／ゆかいなゆかいなポケット／いたずらおばけ／絵人形の作り方／パネルシアターのパネルの作り方／「パネル舞台」設置の仕方／パネルシアターのポイント

キンダーブックの フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第103巻　第12号



幼児の教育　目次

――第一〇三巻　第十二号――

巻頭言　「園案内」の写真は、アクセサリーなのか……大場　幸夫…（4）

昭和戦中期の保育問題研究会の活動(5)　童話の研究　……松本　園子…（8）

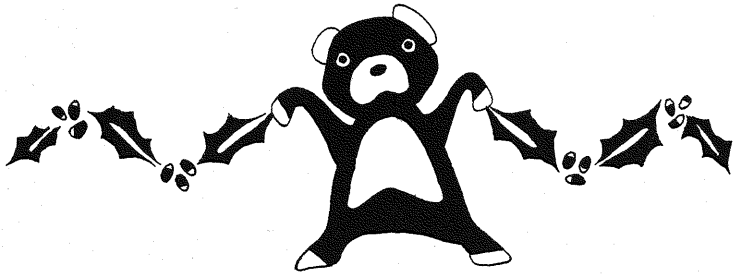
はれ！　ときどき・・・その⑨　……さとうひろこ…（15）

乳児クラスの保育より(5)　雨の日のおでかけ　……田辺　敦子…（16）

世界の子育て事情(5)　アメリカ合衆国　……上垣内伸子…（20）

ポジティブサポートの世界(10)　陥りやすい関係と環境(2)　……村田　愛…（28）

© 2004
日本幼稚園協会



障碍をもつ幼児の保育(28)　―この子と出会ったとき―
自分の居場所を探す……津守　真・津守　房江…（37）
ブレント地域の夏休みのプレイスキーム……ダーリンプル規子…（42）
「伝えたい」思いと「伝えられない」もどかしさ……上坂元絵里…（48）
葉っぱの力(3)……群馬　直美…（54）
幼児の教育第一〇三巻（平成十六年）総目録……（61）

表紙絵／藤原ヒロコ
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「プレゼントのクマ」
編集委員／浜口　順子・田代　和美・佐藤　寛子・吉岡　晶子・仲　明子
編集部／河合　聡子

巻頭言

「園案内」の写真は、アクセサリーなのか

大場　幸夫

過日、機会を得て、ある地域の幼稚園の訪問をした。あいにく時期がわるく台風シーズンのさなかのことであり、あわただしい訪問になった。園舎のなかを見せていただく前に、「園案内」のパンフレットをいただいた。それは、正しくは「平成十六年度　幼稚園要覧」となっていて、教育目標・概況・沿革・職員組織・組別園児数・園舎平面図などが、主として記載されていた。それらの頁の空欄には、子どもたちの園生活のスナップ写真が、いくつか使われていた。

この手の園案内の資料に、写真は付き物である。もちろんそれらの写真が、園側のなんらかの意図があって選ばれたものであることは間違いない。しかしながら、概してそのような案内（要覧）の類では、わざわざ写真の説明をつけてあるものは、それほど多くはない。見ればわ

かるではないか、と言わんばかりに、子どもの笑顔のスナップなどが好んで使われる。

私たちは、子どもたちの笑顔や真剣な取り組みの仕草や表情に〝弱い〟。そういう映像で、ローン勧誘のコマーシャルがあるが、あの手の〝目くらまし〟と通じる怖ささえ覚える。要するに、勝手にそれらを見た人は、想像たくましくして、子どもたちの園生活に期待を膨らませる。説明のない笑顔の写真が、その園の実践のリアリティーを保障するものである証拠は、どこにもないはずである。いつもにこにこしている子だからか、めったに笑わない子を笑わせたからか、この園にくれば子どもたちは笑顔で過ごせるということなのか、いずれにしても、笑顔の説明など滅多に見ることがない。

子どもたちの明るく楽しげな写真を空欄にはめ込めば、園案内の資料が完成する。その限りでは、写真はレイアウトの付き物以上でも以下でもない。しかも、こうしたグラフィックなデザインとしての処置が、幼児教育についての社会的な通念を、無自覚に作り上げる契機になっていることに、保育者は気づきにくい。〝明るい楽しい園生活〟という社会的な通念を。その日私がいただいた〝要覧〟も、そういう意味で、よく見かける構成でできていた。そのままいただくだけで帰れば、これまで訪問した園の紹介資料のひとつに過ぎなかっただろう。

ところが、その日は、園長先生が訪問者に向けて、園の紹介をする中で、その要覧の中の一枚の写真について説明をされたのである。

『たとえば、要覧の表紙に載せたレンゲ畑にいる子どもたちの写真ですが、この畑の持ち主であるAさんが、園児たちのために、毎年のようにレンゲの種を蒔いてくれて、楽しませてくれ

て、ホントにどれほどありがたいことですかねえ。地域の人たちの園児に対する気持ちがとってもうれしいです。』

その写真からは、それがどれくらいの広さになるのか定かではない。しかし普通の園庭の三倍や四倍あるいはそれ以上かもしれないほど、広々とした畑に、Aさんが毎年のように、子どもたちのために、レンゲの種を蒔いてくれているという。一面の花畑に、三々五々子どもたちがいる。園長先生の熱を込めた語りによって、一枚の写真にまつわる園と地域とのつながりのエピソードを知ることになった。写真はそのようなつながりを象徴的に表すものだったのだ。訪問の場でそのような話を聴いて、その園の「要覧」に重みが加わったように感じられた。

「本文とは関係ありません」とわざわざことわりのついた写真を新聞や雑誌に見かけることがある。しかしこの園の要覧に載せられたスナップ写真は、この一枚だけではなく他のスナップ写真にも、しっかりと保育実践を語る中味の濃いストーリーがあった。果たして、ひとはそのように一連のスナップ写真の意味を、読みとってくれるだろうか。いや、このときも、園長先生からこの一枚の写真にまつわるエピソードを伺わなければ、そのメッセージ性を理解することはできなかった。

子どもの写真が載せられるだけで、幼稚園らしさを彩るアクセサリー的な用途に終わっているものが少なくない。要覧が描き出す肝心な園紹介の核心は、ほかならぬこれらの〝アクセサリー的写真〟の方にあるということに、もう一度注目してみたい。

このような案内冊子では、そのレイアウトにおいてメインを補う脇役のように写真を扱って

いることが多いが、実は、保育の肝心かなめはそれらの園生活の風景の中にある。園風景の状況描写が、あまりに日常的であることから、案外保育者自身の着想の中で、figureとしてではなくgroundとして扱われがちなのではないか。その結果、じっくりとかかわる日常の生活そのものをドキュメンタルな資料として活かそうとする理念と、その語り手が保育者自身である、という肝心のところに保育者が気づかずに見過ごすことはないだろうか。

たかが入園案内なのか。そうではなく、〝園の顔〟として、社会的に園の存在理由を開示するチャンスと見て、保育者のメッセージを示すものであっていいのではないか。

その意味で、概して案内あるいは要覧に工夫がないと言うこともできる。園の顔としてのこれらの配布物に、語り尽くせないストーリーがあることを、もっと表現してもいいのではないか、とも思えてくる。

保育実践の本質は、このように語り尽くせないストーリーの豊饒さを保障し、子どもたちの育ちのステージとして、いきいきと過ごし、感性を磨くことのできる環境を整えることにあると、私は考える。子どもたちの育ちのステージは、保育者の専門的に成長するプロセスと重なることを忘れてならないだろう。だから、型どおりのパンフレットこそ、ミッションやアカウンタビリティーが問われるものとして、ハートの伝わる案内づくりへと改善の工夫が求められる。こうした小さな発見にも、最近の話題となる園の自己点検自己評価の問題と重なる話題のように、私には思えてならない。

（大妻女子大学）

昭和戦中期の保育問題研究会の活動(5)

童話の研究

松本　園子

一、保育問題研究会における「言語」の研究

幼稚園令（一九二六～四七年）の下での保育内容は遊戯、唱歌、観察、談話、手技等、と規定され「保育五項目」と呼ばれていました。

このうち「談話」は、子どもへのお話であり、お話の内容は、お伽話もあれば、道徳的な教訓話、時局の話、子どもの日常の出来事に関する話と色々でした。お話を通じて、子どもたちは楽しみ、あるいは知識を与えられ、考えさせられました。しかし、ここでは子どもたちは静かに聞くことを要求される、受け身の存在でした。

「言語」を研究分野として掲げた保育問題研究会の第五部会は、当時の「談話」の内容を含みつつ、子どもにとっての「言語」に新しい視点で注目しました。すなわち、「言語」は子どもの生活の思考的な面の「表現」であり、「言語表現力の陶冶」と「言語による陶冶」の二

方面から研究するという方針がたてられ、この二つが併行して取り組まれました（註1）。

前者は、従来保育ではとりあげられることがなかった問題、というよりも、日本の教育全般で軽視されてきた問題でした。これについては、「話し合い」についての実践記録に基づく研究が行われました。本連載(3)「自由遊びの研究」の中で紹介した海卓子の記録はその一つです（註2）。

今回は、後者の「言語による陶冶」に属する研究をとりあげます。ここでは、従来の「談話」を超えて、童話の創作や、ラジオという新しいメディアを積極的に利用していく取り組みがなされました。

二、童話の研究

問題の第一は、保育の場で子どもに話す良いお話が無いことでした。そこで童話の創作が課題となりました。童話作家も、会員として保育の現場に学び良い童話の創作を目指しましたが、とりわけ保育者自身の創作が熱心に取り組まれたことが特徴です。

◇保育者による童話の創作

第五部会の童話研究で指導的役割を果たした童話作家の川崎大治は、良い童話を生む土台は「幼児に対する時代的認識」と「幼児の生活の具体的把握」であるとしました。そのことから、会員保育者は保育の現場で子どもに接していることと、幅広い学習の機会に恵まれていることから良い童話を創る有利な条件を備えているといい、保育者に創作を勧めました（註3）。

保育者による創作童話の第一弾として、辻美登志（子供の村保育園）の「蟻のおうち」が会の機関誌『保育問題研究』一九三九年一月号に発表されました。翌月号はその誌上検討の特集で、作者のコメント、童話作家（槙本楠郎、川崎大治）、保育者（海卓子、塩谷アイ）の意見が載せられ、童話研究の諸々の課題が提示されました。

辻の作品は、夏、園庭の蟻がさかんに活動している花壇のそばで子どもたちに即興的に語った話をあとで童話

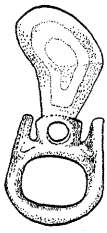
の形式に記録した、というものです。これに対する意見として、例えば槙本は蟻の擬人化が行き過ぎで「お伽話」的常套手段の踏襲に陥っていると批判し、一方川崎は、幼い子どもの心をつかんでいると感心し、擬人化についても幼児のピチピチした生活そのものだと評価しています。

◇創作童話集の発行

一九三九年初めより、会全体として「保育案の研究」に取り組むこととなりました。第五部会の童話研究はそれに対応して新しい保育教材を用意するものとして位置付けられ、創作研究の取り組みが強められました。

そして会員の創作童話を中心とする『幼児童話資料』という冊子が第三輯（しゅう）までまとめられます。それぞれ謄写刷の三～四〇ページのものです。

第一輯冒頭の「発刊の辞」で、この冊子は談話に関する作品を発表する場であり、その条件は「幼稚園、託児所の幼児たちに向かってなされる談話の資料」であること、「そうした意図のための作品なら、表現のうまい、まづいは問題ではありません。ほんとうに幼児たちの保育にあたる会員の力で、よい幼児童話を作り上げて」いこう、とうたっています。内容は次のようなものでした。



第一輯（一九三九年四月一日発行）

天長節・・・・・・・・・・・・・松葉重庸
大きくなったら・・・・・・・・・岡村　民
タンポポの三つの種子・・・・・奈街三郎
おたまじゃくしと蛙・・・・・・辻美登志
羊・・・・・・・・・・・・・・岡　真澄
お猿のラッパ・・・・・・・・・川崎大治
下駄箱・・・・・・・・・・・・塩谷アイ

第二輯（一九三九年六月一日発行）

小蟹の遠足・・・・・・・・・・岡村　民
お話の教育性・・・・・・・・・川崎大治
牛乳を呑む児のお話・・・・・・阿部和子

不思議な橋・・・・・・・・・・・・・・・留岡よし子
指あそび・・・・・・・・・・・・・・・塩谷アイ
お猿の日・・・・・・・・・・・・・・・松葉重庸
おへその話・・・・・・・・・・・・・・平田のぶ

第三輯（一九三九年八月一日発行）

信ちゃんとシロ・・・・・・・・・・・菅　忠道
ホタル・・・・・・・・・・・・・・・留岡よし子
木馬・・・・・・・・・・・・・・・・加藤規子
風に飛ばされた金魚・・・・・・・・・垣内静江
カラスの幼稚園・・・・・・・・・・・中千枝子

これらの書き手は、松葉、川崎、奈街、菅を除いて、幼稚園、託児所の保育者です。私はいずれも面白く読みました。作品としての評価は私には出来ませんが、戦時下の厳しい時代の保育者が子どもたちに話すための童話の創作に取り組んだという事実に、意外な思いと少しばかりの嬉しさのようなものを感じます。

この冊子は、会員であった井手ナホさん（故人）が大事に保存していたものです。埋もれていたこれらの作品のうち、拙著（註4）に資料として、みちる幼稚園の岡村「大きくなったら」、塩谷「下駄箱」、十文字幼稚園の留岡「ホタル」の三点を掲載しました。

川崎は、第二輯に発表した評論「お話の教育性」の中で、第一輯の七作品を評し、幼児への生活指導ということが強く考えられており、全体として、芸術的な作品というよりは、教育的な作品としての特色を持っていると特徴づけ「実際家が現実の中から高く立とうとしてゐると同時に創作家が地に足つけようと努力」しており、今後の進展により「高い教育の確立があると同時に、高い芸術の確立もある」であろうと結んでいます。ここに保育問題研究会の童話研究の特徴と到達点が語られているといってよいでしょう。

三、ラジオの研究

わが国におけるラジオ放送の開始は一九二五（大正一四）年です。その後受信は急速に広がり、番組も多様に

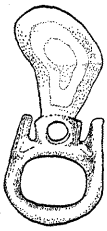
なっていきました。学校放送についても、その一部として「幼児の時間」がおかれていましたが、一九三九年四月からは、従来週二回だったそれが、日曜を除く毎日放送されることになりました。会は、それを前にして保育におけるラジオの活用という問題に注目しました。

◇ラジオの幼児の時間の意義

一九三八年一〇月の月例研究会は「ラジオの問題」がテーマとされ、城戸幡太郎（会長）「幼児生活とラジオ」、西本三十二（日本放送協会）「『幼児の時間』に就て」、川崎大治「『幼児の時間』私見」の三報告がなされました。

城戸はラジオを視覚的触覚的作業と結びつけることにより有効に利用することができるとし、また皆で聴くことによって時間的規則をつけることや団体的訓練ができるという点にもふれました。当時彼は、映画やラジオを新しい「教具」として教育に積極的に利用することを主張し、その研究をすすめていました。会のラジオ研究も、城戸のこの問題意識からスタートしています。

送り手側の西本はラジオが音楽教育やお話の分野で一般の家や保育施設では得難い水準の高いものを送ることによって、幼児教育に貢献しうるとしました。童話作家の川崎は従来の放送内容に問題の多いことを指摘し、実際の放送を改善することへの皆の協力が必要であるとしました。そして「幼児の時間」に必要なお話や劇や遊戯を、作家が一人勝手に、机の上で、頭の中でつくるのでなく「集団的協力による創作」が必要だと提案しています。



三九年四月より、毎朝九時四五分から「幼児の時間」が放送されることとなり、幼稚園、託児所でどのようにこの時間を利用したらよいか、どんな放送内容がよいか等について研究することを目的に、第五部会の中に「ラジオ研究委員会」が設けられました。

◇放送原稿の協同製作

ラジオ研究委員会には放送局側のメンバーも参加し、放送原稿の協同製作が取り組まれました。ここで先の川

崎の提案が具体化されたわけですが、協同製作は研究会で原作の発表、それを検討して訂正、放送後また検討、という手順ですすめられました。

第一作は留岡よし子作の「観察話『ホタル』」でした。留岡はこの作品のために銀座の街角で蛍売りに取材し、三九年六月九日の研究委員会で原作を発表しました。夜店から買って来たほたるを虫眼鏡で観察したり、画に描いたりという留岡の提案に対して、幼児の観察はそのような観察実験的なものではいけない、幼児の観察指導は先ず、観察する態度の指導であり、その指導も観察物の生活する場面でなくてはいけない等、修正意見が出されました。これらの意見をいれて改作し、十六日の研究委員会で承認され、六月二十四日の「幼児の時間」に放送されました。留岡作の放送台本「ホタル」は、前掲の『幼児童話資料』第三輯に掲載されています。

ラジオ放送童話は他に次のような作品が創作、放送されました。

・菅忠道「信ちゃんとシロ」（一九三九・七・一〇、尋常一年生の時間）＊

・中千枝子「カラスの幼稚園」（一九三九・九・一六）＊

・松葉重庸「玩具祭り」「ツミキアソビ」（一九三九・十一）

・留岡よし子「オテテツナイデ」（一九三九・十一）

＊の作品は『童話資料』に収録されている。

◇ラジオ放送聴取の研究

幼稚園、託児所でラジオをどう利用するかについての共同研究も行われ、聴取記録様式も作成されました。「観察話『ホタル』」については、東京市箱崎幼稚園で聴かせた取り組みの記録が会誌に掲載されています。放送を聴きながら、保育者と子どもたちの間で様々なことばが交わされ、放送後もホタルについての話題が広がり、十五分のラジオ放送が三〇～四〇分のやり取りに膨らんださまが記録されています。二日後の自由画のときに、ホタル取りを画いている子が三人いたということも記してあります。

ラジオは前掲の西本がいうように、優れた文化を提供

し誰もが容易く享受することを可能にしました。会はこのプラス面を保育に利用することを考え、幼児番組制作に直接かかわりました。また、番組を有効に利用するために、子どもと共に聴取しながら記録をとる実践的研究もおこないました。

しかし、ラジオは大衆的メディアとして日本全国に同時に共通の経験を提供し、国家総動員の機関としての機能を発揮し、無謀な戦争に全国民を引きずりこんでいく役割を、新聞とともに果たしました（註5）。

このようなラジオの功罪は、テレビにおいて一層拡大されています。しかも、今日子どもとテレビの問題を考える場合、番組内容に利用者がかかわるなどということは全く不可能となっており、功罪いずれを論ずる場合も、受け身の受け手にとってのそれがもっぱら語られています。

戦中期の保育問題研究会がラジオ番組の制作にかかわったように、今日保育を担う人たちがテレビの幼児番組制作にかかわることはできないのだろうか、もしそれができるとしたら、様々な可能性をもったテレビというメディアで、どのような番組をつくることができるだろうかと、ちょっと考えてしまいました。

（淑徳短期大学）

註

1　松本園子『昭和戦中期の保育問題研究会―保育者と研究者の共同の軌跡／一九三六～一九四三』新読書社、二〇〇三　二部一章四節「言語」参照

2　拙稿「昭和戦中期の保育問題研究会の研究(3)自由遊びの研究」『幼児の教育』二〇〇四・八

3　川崎大治「幼児童話の新しい夜明」『保育問題研究』二巻四号、一九三八・九

4　註1

5　藤竹暁、「ラジオの登場」『週刊朝日百科一〇七日本の歴史』二〇〇四・六

はれ！ときどき

その⑨　＊さとうひろこ＊

時間

通りが色とりどりのイルミネーションでにぎわい始めると「今年ももう終わりなんだなー」と、少し淋しい気持になる。

いつからだろう？

クリスマスのきれいな飾りつけに心が躍り、新しい年の訪れが待ち遠しくてたまらなかったのに……。

今年もいろいろあったなぁと振り返りながら、忙しさを理由に手をつけていなかった幼稚園の写真の整理をした。一昨年やその前のものも出てきていつの間にか手が止まり見入ってしまう。子どもたちの成長は本当に目覚ましい。三歳の頃の緊張したからだや表情が、時を経るごとに解きほぐされ、その人らしさがにじみ出てくる。傍らに写る私の体格や態度の変化の著しさにはがっかりするものの、子どもたちが幼稚園で良い時間を過ごしていることを感じ、ほっとした。

今年は、とても懐かしい出会いがあった。園で行っている研修会で、高校時代の同級生にばったり再会したのだ。十何年もの時間が流れ、お互い少し（？）変化があるものの、話をするうちに、一気に高校時代の二人に戻ってしまった。

あの頃、同じ教室で同じ時間をともに過ごした友達が四月から社会人向けの大学院の学生になって、またこうして同じキャンパス内で学んでいるということを知り、驚いたのと同時にとても嬉しかった。

彼女との再会は、私たちのあの頃の時間をより一層かけがえのないものにしてくれた。

年を重ねることの意味が少し分かったような気がする。

来年はどんな年だろう。なんだか楽しみになってきた。

（幼稚園勤務）

乳児クラスの保育より(5)

雨の日のおでかけ

田辺　敦子

雨降りが続く梅雨の時期、毎年子どもたちの遊びには「雨」に関連した再現遊びが多く見られる様になります。雨の少なかった今年の梅雨時にも、やはり多様な雨降りの遊びが展開されました。子どもにとって、雨がいかに身近な自然事象であるのか改めて気付かされましたが、それと同時に、子ども自身の身近に起こる出来事や実体験が、即遊びに反映されていくことの面白さも実感しました。子どもの遊びと生活とは密接な関わりを持っているものですが、それは、既に乳児期の段階から始まっており、両者はフーガのように追いかけ合い、交差しながら互いに刺激し合っているのだと再認識することができます。優雅に膨らんでいくフーガの主題がシンプルな旋律であるのと同様に、乳児の遊びもまた、

テーマ自体はごく身近な素材であるために、遊びと生活とを行ったり来たりしながら、柔軟に遊びを展開していくことができるのでしょう。

さて、今年の一歳児クラスでは、「雨降りの遊びといえば『雨の日のおでかけごっこ』！」というほど、この遊びが人気を博しました。一口に『雨の日のおでかけ』と言っても、その状況設定は毎回微妙に異なり、その時々によって遊びの内容に違いが出てくるので新鮮です。例えば「雨が降っている」「雨が降りそう」または「雨上がり」という状況を考えるだけでも、見立てた道具の使い方にも違いが出てきます。経験したことが体系化できていない部分については、様子を見て、大人が意識して具体的な言葉掛けや問い掛けをし、子どもの遊びに拡がりが出るよう配慮することもありますが、それらのヒントを得た子どもたちは、こちらの予想を越えたひらめきを持って遊びを発展させていきます。

雨が降っている、または雨が降りそうだ、という設定で始まるこの遊びには、子どもたちが日頃身につける傘や長靴、レインコートなどの『雨の日グッズ』が見立てられていきます。遊びのテーマだけにとどまらず、見立てに使う遊具も、素朴な素材を使ったシンプルなものになっています。そのため、ちょっとした工夫によって、それらを子どもたち自身の手で身につけることができ、遊びを中断させずに進めていくことができます。例えば、最も簡単な見立て傘は、布一枚を頭にかぶせるだけで完成です。これなら、遊びの途中で傘が必要になった時にも、傘作りに時間を割くことなく、さっと傘をさすことができます。瞬間的に「私もやりたい！」という気持になりやすいこの時期だけに、瞬時の思い

に即応できることは、子どもの欲求を満たすと同時に、その遊びを発展させていくための大切な鍵になってくるのです。また例の布で見立てたシンプル傘について付け加えると、突然の大雨に即対応できるだけでなく、雨が止んだ時にもすぐその傘（布）をたためるという利点があります。たたんだ傘をまた使うかもしれないという見通しを持ってなのか、多くの子どもたちは、その傘を手持ちのバッグに携帯して遊びを続けているので、なんともほほえましいです。ちなみに、バッグは子どもたちの中で、おでかけ時のシンボルになっているようです。

さて、乳児期の子どもたちにとって、見立て遊具は欠かすことのできない大切な存在です。そこで私たち保育者は、よりシンプルで組合せが自由自在の遊具を揃えるように配慮しています。子どもたちの成長段階に応じて出し入れしていく遊具がある一方で、布・お手玉・ビーズリングなどの見立てやすい遊具に関しては、年間を通じて常時遊具棚に配置するようにしています。そのためか、子どもたちにとっても、それらの遊具が体の一部ならぬ遊びの一部となっており、遊びが変化していく中でも、それらを巧みに使いこなして見立てています。クラスの誰もが玩具作家といって良いほど次から次に見立てが連鎖していき、大人も子どもも想像力に磨きがかかる毎日です。更に、仲間が手に持っている遊具は非常に魅力的に見えるようで、お互いの遊具を欲しがったり模倣したりすることもしば

しばですが、その時々の流行があるのも興味深いところです。

また、遊びの内容を見ても、子どもたちの再現力が光っていて、雨の日に傘をさしたり長靴を履いて歩いたりした経験が、細やかな仕草や身振りを加えながらそのまま遊びに反映されていきました。例えば、Mちゃんはどこかで傘をたたむ場面を見たのでしょう、遊びの中でバスに乗る際も、傘をたたんで自分の傍に置いていました。またKちゃんは、抱いていたくまのぬいぐるみにも傘をさし、布で身体をくるんであげていました。Kちゃんは、お母さんが自分にレインコートを着せてくれたことを思い出していたのかもしれません。

更に、それまで単調な遊びを満喫していた子も、大人や仲間のモデルを目にし、自らも模倣していくことで、細やかな部分も意識化されていくようです。仲間と刺激し合いながら遊びと生活とを行き来している子どもたちは、その世界をぐんぐんと拡げつつあります。

今は夏、子どもたちの遊びは、園での水遊びや家庭での入浴・プール遊びなどをヒントに、また新たな再現遊びを展開しています。暑い毎日ですが、水（湯）の心地よさを知り、『雨の日のおでかけ』とはまた違った角度から自然物とのふれあいの様子を遊びの中で見せている子どもは、夏の暑さにも負けないほど活気に満ちています。

（かしのき保育園）

世界の子育て事情(5)

アメリカ合衆国

上垣内　伸子

一．子どものいる家庭の就労と保育の実態

アメリカでは、二〇〇二年に十八歳未満の子どものいる母親の七十二パーセント、就学前乳幼児の母親の六十四パーセントが就労している（表1）。〇歳児だけを見ても五十六パーセントの有職率である。アメリカは、子育ては基本的には家族のプライベートな問題であるから政府は積極的に介入しないという方針を長い間とってきた。そのため、社会全体で子どもと家族を支えるという考え方が主流のヨーロッパや日本などの先進諸国に比べて、保育・子育て支援システムは貧弱である。母親が就労している五歳未満の子どもの半数以上が親自身や祖母などの親族からの世話を受けており（図1）、低所得家庭での保育所など家庭外の保育施設利用がより少なく、祖父母らによる保育が多い。その背景としては、認可保育施設の保育料の高さと、長時間労働や交代勤務、深夜労働など、保育所では対応しにくい厳しい条件下で働いていることがある。

アメリカの有職の母親の比率の高さは、女性管理職の多さと低所得家庭の親の労働という階層化された構造をもっており、そのため、母親が働いている子どもが受ける保育の質の差が経済状態によって広がるという状況を作り出している。十分な保育サービスを受けられない子どもの生活の質を保障するために何をするかが、アメリカの保育・子育て支援の課題の一つとなっている。

▼表1　子どもの年齢別に見た
ワーキングマザーの割合（2002年）

子どもの年齢	%
18歳未満全体	72.20%
6歳から17歳	78.60%
6歳未満	64.10%
0歳～2歳	60.20%
2歳	64.30%
1歳	60.50%
0歳	56.10%

（アメリカ労働省、労働統計局）

二．連邦政府・州政府・地域ＮＰＯ・企業

地域ＮＰＯに地元企業が協力して子育てを支えるなど、政府主導ではなく、民間組織が保育の中心的役割をになっているのがアメリカの特徴である。

連邦政府の施策は、低所得家庭を対象とした、就労支援と保育サービスの提供が主であるが、クリントン政権

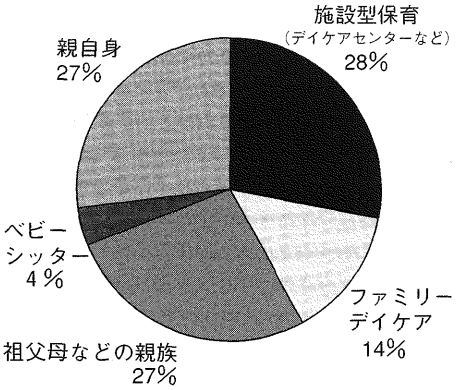


図1　親就労の5歳未満児の保育状況
（1999年）
（the National Survey of America's Families）

下では「福祉から就労へ（welfare to work）」という考えに立ち労働者全体を対象とした就労と家庭生活の両立支援施策が進められ、一九九三年には、「家庭・医療休暇法」が成立し、出産・育児、家庭の介護、自分の病気等のために年間十二週間までの休暇が取れるようになった。ブッシュ政権発足後の二〇〇二年には、学力の向上と差の縮小を目指した「落ちこぼれを作らないための初等中等教育法」（No Child Left Behind Act of 2001）が成立し、「新幼児教育政策」が発表された。就学前児童の読解指導、ヘッドスタートの強化、保育者の質の向上、親や保育者への児童発達に関する研究成果の通知が主な内容である。学校教育の所管である教育省とヘッドスタートも含めた保育関連部局を持つ健康福祉省、州政府とが連携して推進していくことが強調されている。

州政府は独自の認可基準を設定し、施設の認可や助成を行う。例えば、保育者と子どもの人数比はカリフォルニア州の場合、〇～一歳半は四対一、一歳半～三歳は六対一、三～五歳は十二対一、六歳以上は十四対一と決められている。

数多くの非営利民間組織（ＮＰＯ）が地域の草の根活動から発展し、行政が支援し、住民と企業からの寄付によって運営されている。保育施設の運営はもとより、州政府の認可基準よりも厳しい基準を独自に設定して質の高い保育施設の認定（アクレディテーション）を行う全米幼児教育協会（ＮＡＥＹＣ）、全米中の保育施設の検索サービスを行う全米保育情報協会（ＮＡＣＣＲＲＡ）、親教育プログラム〝ペアレンツ・アズ・ティーチャーズ（ＰＡＴ）〟をはじめ、多様な保育関連サービスがＮＰＯを中心として推進されている。

企業は財政支援にとどまらず、人材派遣、保育施設設立運営などいろいろな形で貢献している。自社社員の利便性を図る、自社社員の生活の質を高め生きがい感を生成する、企業イメージを高める、などが目的である。ファミリーフレンドリー（家族に優しい）と評価されることは質の高い労働力の確保にもつながる。仕事と生活の両方に生きがいと充実感を持ち、家族とのふれ合いと

絆を大切にする働き方を求める流れを受け、ファミリーフレンドリー・ワーク／ライフ・プログラムを持つことが、企業評価の指標の一つともなっている。

三、保育サービスのいろいろ

アメリカの保育サービスはデイケアセンター（保育所）、プリスクールやナーサリースクール（日本の幼稚園に当たる）、ヘッドスタートプログラムなどの施設型保育、保育者が自分の自宅で行うファミリーデイケア、ベビーシッターと多様である。家庭外の保育の場として、低年齢児では家庭環境に近いファミリーデイケアが好まれる傾向にある。

互助とボランタリー精神、チャリティー精神というのは、建国以来アメリカが培ってきた心性であり、子育てに関しても地域での支え合い・助け合いのシステムが古くから機能してきた。「マザーズ・デイ・アウト」は、南部に多く見られる教会がボランティアで子どもを二～三時間程度預かるサービスであり、地域を基盤にした昔からの子育て支援であった。「プレイグループ」や「ベビーシッター・コープ」という、親同士がグループを作って自主保育を行ったり子どもを預かり合う活動もある。共働き家庭や単親家庭が増加し家族形態が多様になると共に、こうした従来型の支援だけではニーズに応じられなくなって来ているが、その精神は健在であり新たな支援が展開されている。ワーキングマザーのグループを作ったり、インターネットを利用して交流をしている「プレイグループ」や、親だけですごす時間を保障する保育所の「ペアレント・ナイト・アウト」やコミュニティセンターでの一時保育などである。

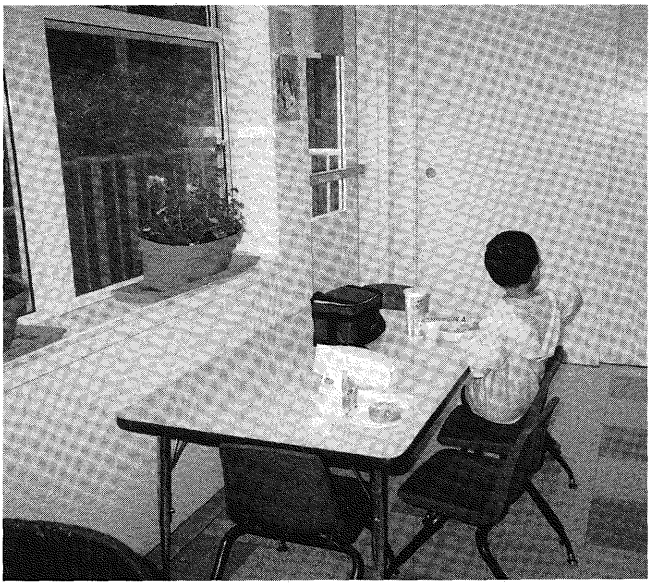
育児相談と親教育の場としては、日本では保健所がその機能を無料で果たしているが、アメリカでは市・郡以外に民間団体が有料で親教育プログラムを実施している。父親も含めて働く親が参加しやすい夜や週末に開催したり、家庭や地域の集会所や職場に出かけて出張講座を開くなど、柔軟な対応がなされている。親子で通園して親も学習の機会を持つ「ペアレント・プリスクール」

などもある。

以上のような保育サービスの具体例として、NPOが中心となって地域の保育ニーズに柔軟に対応し、地域ぐるみの子育てを目指して活動している施設を紹介する。

四、多様な働き方に対応した保育施設
――PALCARE（パルケア）

単親家庭と共働き家庭の増加により、国際空港など二十四時間稼動の職場では、夜間就業や休日勤務、交代制に対応する良質な保育施設の確保が課題となっている。サンフランシスコ国際空港からほど近いバーリンゲン市にあるパルケアは、一九九三年に、空港労働者連合が中心となり労働組合、地元企業、地域住民、郡の担当者らが立案し、航空会社、病院、民間寄付団体が出資し、郡が建物を貸与して開設した、毎日朝五時から深夜十二時までの保育を行う公設民営の保育所である。定員の半分は空港・病院・出資企業関係者にあてられ、残りが地域住民に開かれている。生後三ヶ月から五歳児まで百五十人定員。保育者は五十五人、六時以降は夜間専属のスタッフが保育する。ほとんどの子どもは七時頃までに降園し夜まで残るのは数人程度であるが、夜遅くなっても頂けられるところがあるという安心感が仕事への意欲に



▲パルケア　持参した朝食を食べている

つながるという。

パルケアの特徴は、保育時間の長さだけではない。親の保育への参加機会を積極的に設けている。学習会や行事の手伝い、持ち寄り夕食会、ビアパーティなど、普段はなかなか集えない親たちが仲良く交流・情報交換できる場を作るほか、運営にも親が監事として参加し意見を反映させている。

常に地域の人々に開かれており、年間七十時間の保育ボランティアを義務づけられている地元の高校生達にとって、いつでも温かく迎えられる場となっている。地元企業で働く人たちも時間を見つけては草取りやペンキ塗りにやってくる。労働の中にコミュニティワークも位置づけ、地域とのつながりの中で生活と労働とが自然な形で共存する働き方の企業が増えていることの表われであろう。また、第一火曜の夜はピザナイトと称して、近所のピザ屋に親たちが自由に集って過ごす。この日は売り上げの十五パーセントがパルケアに寄付されることになっていて、スタッフや街の人たちも加わり話が弾む。長時間労働の共働きの家庭では、親も子どもも家庭と保育所の往復で生活世界が広がりにくいが、施設を地域に開き、保育の中に地域を巻き込むことで、世界が広がり、支え合う関係が生まれていく。

五．コミュニティのニーズに対応し ネットワークを図るＮＰＯ――ＰＡＣＣＣ

サンフランシスコの南のパロアルト市は、コンピュータ関連のベンチャー企業の立ち並ぶシリコンバレーの町。共働き家庭が多く、子育てや教育への関心も高い。

パロアルト地域保育センター（ＰＡＣＣＣ）は、一九七四年に市議会が設立し、ＮＰＯが運営する公設民営の組織であり、十五カ所の保育施設（保育所三、プリスクール四、始業前・放課後学童保育所八）をもつ。当初は良質の保育の提供を目的として保育所の運営から出発したが、始業前および放課後の学童保育へと軸足を移してきている。就学前に比べて学齢児の保育サービスが不足しているという現実に対応してきた結果である。また現在

▲PACCC　始業前の学童クラブの様子

では、保育者や親、地域住民への保育情報・教材の提供、保育者のネットワーク作り、コミュニティを繋ぐウェブサイトの運営協力などの活動も行っている。本部に置かれたリソースルームでは、地域のイベント案内、情報提供、保育教材や図書、視聴覚機材の閲覧と貸し出し、教材作成のための機材やコンピュータの利用等ができ、会合も開ける。

アメリカでは、保育労働はその専門性が認知されにくく、研修の機会も少なく賃金も安いため、短期間での離職者が多い。PACCCは、保育の質の向上と保育者の職場定着につながるとして、保育者の交流組織を運営してパロアルト周辺の保育者の研修と交流を図っている。「ファミリー・リソーシーズ」というコミュニティ・ウェブサイトの運営にも参加し、地域社会が子どもと子育てへの関心を高めていくことにも取り組んでいる。日本では地域社会を繋ぐ仕事を専業主婦が無償で負い、町内会や子ども会の世話などを通して地域の人々の交流を支えていたが、少子化と共働きの増加によりこの層が減

少してきている。アメリカでも同様で、そこで登場したのが地域コンピュータネットワークである。ネットで検索して連絡をとり、実際に出かけて会って交流し関係を発展させていくというように、バーチャルなコミュニティと現実のコミュニティが相まって密な人間関係を紡いでいくものとなっている。

六．おわりに

アメリカの保育サービスは、他の先進国に比して質量共に不十分な部分が多い。けれども、地域住民、保育専門機関、企業、誰もが、そこに生活し育っていく子どもたちに対して自分のできる範囲で積極的に関わり、そのことが子どもばかりでなく自分自身の生活の豊かさともなっていくという生き方は意義深い。地域社会とは、地域に関わって生活するすべての人が協力して、温かい人的ネットワークと機能的システムとサービスとを作り上げていくところに成立する集団に他ならないからだ。ヒラリー・クリントンは子育てに関する著書のタイトルをアフリカのことわざを借りて「ひとりの子どもを育てるには村中みんなの力が必要（It takes a Village）」とし、子どもと家族を大切にする社会の構築と一人ひとりが子どもを育てていく機会と責任を持つことを訴えている。子育てに喜びをもてる社会は、そのような一人ひとりの努力によって作り出されていくのではないだろうか。

（十文字学園女子大学）

参考文献

上垣内伸子「カリフォルニア州パロアルト市とその周辺の保育・子育て支援―ファミリーフレンドリーポリシーに基づいた子育て家庭支援社会の構築―」『児童研究』第80巻、日本児童学会、二〇〇一年

ヒラリー・ロダム・クリントン（繁田進・向田久美子訳）「村中みんなで　子どもたちから学ぶ教訓」あすなろ書房、一九九六年

ポジティブサポートの世界(10)

陥りやすい関係と環境(2)

村田　愛

前回、ポジティブサポートが有効に働かない場合に見られる、陥りやすい関係と環境の問題点を挙げました。要約すると次のようなものです。

＊一方的関係

守る者対守られる者、教える者対教わる者、管理する者対管理される者など、役割意識が強く、本来持つべき関係の柔軟性が無くなり、お互いが持つ可能性に気付きにくくなっている関係

＊I know best 症候群

教育関係者が特に持ちやすい、担当の子どもを自分が一番よく知っているという自負・自信からなる閉鎖的な関係。一番とは言わずとも十分知っ

ているとある程度（多くの場合一方的に）満足している状態で、「あ～知っている。知っている」と全てわかってしまっているように勝手に信じ込み、新しい関係やその人の拡がりに気づくことや拡がりを支えることを難しくする。

＊「ルールに則る」＝行動や表現の制限→関係にヒビ

一方的に定められたあるルールを守ることが先にあり、人の考えや欲求、要求を聴こうとしないこと

作為的アプローチ

＊パターン化したファイリング

問題回避的発想、問題児化

怒り、悲しみの表現を問題視するだけに留まり、次からは「問題」を起こす前にその場しのぎの手を打とうとする。表現の奥にある本人の抱えている本質的な問題を捉えようとしない。

＊臭いものにはフタ的発想

生活がこれ以上混沌としたものにならないように考え、現状を維持しようとし、様々なものにフタをすること。例えば、相手のことを「知らない」自分の感情にフタをしてしまうことで、相手に関する「わからないこと」に触れずにすみ、それが安定した状態であるとすること。また、「ある言葉の意味するもの」を叶うはずがない夢のようなものを象徴すると勘ぐり・思い込み、いつの間にか発して欲しくない言葉、周りも触れてはいけない話題としてしか「それ」を捉えられなくなってしまう。つまり、〝寝ている子は起こさないアプローチ〟に陥ってしまう。

このような関係と環境は、誰もが陥りやすいものでしょう。そして、このような関係に陥ると、問題を対象者本人にあるものとし、自分（環境）が創り

出している問題でもあることに気付こうとしない自己防衛が働き、悪循環が起こってきます。その時、ポジティブサポートの展開が難しくなります。

しかし、本来ポジティブサポートは、このようなそれぞれの人が自分らしく生きられない状況をより望ましい方向へ展開させるためのものです。そのポジティブサポートの本来の力を発揮させるには、そこにある問題をどう捉え、何に焦点化すればよいのでしょうか。今回は、このことを詳しく考えていきたいと思います。

私たちは、障碍を持つ人の入所施設でも定期的なポジティブサポートのセッションを行っています。一口に入所施設といっても様々なものがあります。一人一人の生き方を大切に考え、日々の時間の過ごし方を個人で決める自由度を持ち、食事の取り方や部屋の内装、洋服の好み、など細かなものに個別性を反映させて生活を展開しているところもあります。しかし、残念ながらそうでないところもあります。集団生活になるために出てくる制限もあります。入所している人達も様々です。言葉で自分の気持ちを伝えることができる人もいれば、違ったかたちの表現で伝える人もいます。生活と集団という様々な要素が入り混じる混沌の中で、いかに個人の人生と向き合うか、ということが一つの大きな課題であるとも言えると思います。このような様々な要素が絡み合い、本質的なコミュニケーションが生じない状況が生れてしまうこともあるようです。

例えば、たくさんの寮からなる入所施設で、ある寮にいつも、〝ジュースが欲しい〟と他の寮からやってくる人がいるとします。その人への対応はいつも決まっていて、食堂の戸棚に鍵をかけたまま、「ジュースはない」と告げることだとします。そして、〝ジュース〟「ジュースはない」の押し問答の応

酬が毎日のように続けられます。このコミュニケーションの意味は何なのでしょうか。もしくは、これがコミュニケーションと言えるのでしょうか。ジュースの要求に隠された本当の要求とは、お仕着せのルール、お仕着せの生活に対する再考を求める自然な要求だろうとか、自分には無い選択肢をいつも押し付けられている関係を逆に体験させることで、コミュニケーションのあり方の再考を求めているのだろうとか、そういった発想さえ出来なくなっている環境というのが実際にあります。

そこで、人が生き生きとするために必要な本質的なコミュニケーションとはどのようなものか、「共に生きる」とはどういうことかを問い直したいと思います。

出会っているコミュニケーション

人と話しをするとき、共有できる内容に焦点を合わせて話すのではなく、（共有できないことについて話すうち）自ずと議論に展開していくことがあります。熱く議論を交わすことで確かに心が向き合い、相手のことを感じられたり、相手の大切なこと（幹／核／心の居場所のようなもの）が見えたりしてきます。意見の違う点を非難し合うのではなく、相手をより理解したいという気持ちをもって議論することで、関係が深まった体験は多くの人がもっていることと思います。熱く議論を交わす時は、お互いに意見が違うこと、見方、感じ方が違うことをお互いに主張し、共通するものをある程度感じながらも、違いを理解し合うことに熱中する時でもあると思います。だからこそ、凝縮したエネルギーを要し

たとしても、そこには楽しい感覚や新鮮な感覚が伴い、関係が深まっていく満足感と期待感がもてるのでしょう。それは、とことん心が向き合って、出会っていることの表れではないでしょうか。

コミュニケーションは、お互いの違いを認めることのための手段とも言えるのではないでしょうか。コミュニケーションは、お互いに影響されるものであり、その関係に変化を生みます。相手に主張しながら、また自分を見つめる行為でもあるのです。そのことで自分の考えや意見を深めたりして、自分も進歩していきます。そうしてお互いの進歩が生まれ、尊重し合えるようになるのではないでしょうか。

かすりのコミュニケーション

それに対して、前述の「寝ている子を起こさないアプローチ」をしていると、本題がわからないまま、かすっているコミュニケーションに陥りやすくなります。

ある入所施設で無断外出をくり返す人（Oさん）がいました。Oさんの家族は一切Oさんと関わるつもりが無いとその施設のスタッフに入所当時（数年前）伝えていましたが、スタッフはOさんの気持ちを思いやり、そのことは伝えていませんでした。そして、「家」という言葉や「家族」の話題はできるだけ避けてきました。しかし、無断外出は続き、それだけ取り上げて問題視され続けてきました。Oさんは、その「無断外出」の度にOさんの自宅の前で迎えに来たスタッフに「つかまって」いました。Oさんは家のインターフォンを何時間も押し続けますが、家族は居留守をつかいます。Oさんのいないところで家族から「迷惑だ」とスタッフが後から言われるという繰り返しだったそうです。本当にOさんが求めていることはどういうことなのか。その家族

の事実上起きていることや関係をスタッフが隠し続けて、Oさんが納得できる時が来るのか。それで、Oさんは何をどう納得するのか。そんなことを考えずにいられませんでした。

かすっているコミュニケーションは、お互いに一方的であり、双方が主張はしているけれども、お互いの距離は縮まらない状態になってしまう場合を言います。かすっているコミュニケーションを継続して経験すると、互いに遠慮し合うようになり、少なくとも片方にフラストレーションがたまると同時にお互いを信頼できなくなることが起こってくると私は考えます。

かすっている場合は、純粋に遠い・知らない存在とのやりとりよりも切なくもどかしいものです。純粋に遠ければ、通じ合わないことも予測でき、それ程期待もしません。しかし、かすってしまうと痛みを伴います。片方は期待をして伝えようとしていても本質的な内容・意味が伝わらない。また、それは伝え方の問題では無いような感触と消化不良的感覚があってそれをくり返す場合、精神的に不安定になるのは当然ではないでしょうか。相手のことを「知らない」ところに留まり、心が向き合わない状態が続き、ぶつかることには抵抗感を示し、しまいには信頼しあえない関係に陥ることもあるでしょう。

つまり、相手や自分に対する理解が深まり、関係が深まっていく「チャンス」が、脅かされるだけの存在である「ピンチ」としてしか捉えられなくなってしまいます。それでは本来のコミュニケーションからは程遠いものになってしまうのです。

「共に生きる」とは？

それでは、本来のコミュニケーションを取り戻し、「共に生きる」にはどうすればいいのでしょうか。

管理する／される関係に陥りやすい入所施設という集団の中で生活していて、不自由感を感じて生きていることを主張するのは、当然だと思います。むしろ、主張し続けられるところにたくましさと必死さを感じ、感銘をうけてしまうことさえあります。

しかし、よく考えてみると、それ自体が悪循環とも言えるのです。その生活の中の具体的な不自由感を訴えることで、やっと「自分」というものが主張できて、「譲れない自分らしさ」をほのかに実感できる唯一の手段になってしまうこともあるのではないかと「はっ」とします。つまり、関係や環境が改善されることを期待して主張しているのではなく、主張することでのみ自分というものを確認し、自分が生きていることを感じているのかもしれないのです。そして周囲がその主張に対して抵抗を示すだけで終わっても、主張することでしか生きていることを実感できていなければ、くり返すのは当然の行為でしょう。そこで、主張―抵抗というやりとりがくり返されるだけの日常に陥ってしまうという悪循環が起こります。

そこで、その悪循環から脱するためにできること、を考えずにはいられなくなるのが健康的な発想の転換なのではないかと思います。まずはそこで発せられる言葉に耳を傾けるということが、さらに正確に言えば心を傾けて聴いてみることが必要とされているのではないでしょうか。

そして、その主張の意味や内容を受け取ったように感じられたら、その後できることを考えていきま

す。まず最初に思いつくことは、情報量、特に選択肢をできる限り操作せずに伝えること。何を選ぶことがその人にとって望ましいかを考え、より多くの選択肢を想像することです。それをその人と一緒に考える過程に、重要な意味があると考えます。場合によって、それぞれの選択肢に伴う結果をも推測しながら、その本人が引き受けられることかどうかも一緒に考えなければなりません。そして、もう一度さらに一緒に考えます。時には、結果が想像と違い本人が悲しむ結果になってしまったり、誰かを怒らせるようなことになってしまったりしても、そこをも付き合い支えることができたらよいのではないでしょうか。付き合うつもりがあることをその相手に知ってもらえるだけでもよいのかもしれません。

私は、人と関わる時に一番大切にしなければならないことは自分を偽らず、相手と一緒に考えていく姿勢ではないかと思います。つまり一緒に上下のない横並びの関係で、丁寧にその人や自分の生活のあり方や人生を考えていくことではないかと思います。代わりに考えてあげることでも、答えを出してあげることでもないのです。

「共に生きる」とは、それぞれの人が本来の自分らしさを人生の中で自分なりに実現させていく過程を支え合うことではないかと考えます。

ポジティブサポートの可能性

今まで挙げてきた例やアプローチは、誰もが陥りやすいものです。

発展的な期待を人間関係に持たず、そして、人の中に新しい発見もできないことで自らの発見も無いまま、関係に変化がない停滞した状態、もしくは周

りを知らずにも傷つけているという悪循環。

そのように誰もが陥りやすいことをポジティブサポートは踏まえ、そこから脱する糸口となり得るものとして存在すると私は思います。

ポジティブサポートは、参加者自身や本人との関係性や環境全体に変化を起こすものです。相手の「知らない」ことや「わからないこと」にフタをして見ないようにしている人は、そういうフタをしている自分をも見ようとしないということが往々にしてあります。そして、ポジティブサポートのようにそのような知らない自分を意識することが必要な活動は、自分を脅かすことでもあるでしょう。それが変化への強い抵抗となって現れる時があります。すると、ポジティブサポートの展開が非常に難しくなってしまうのです。

しかし、ポジティブサポートは、本人（Xさん）の為に行われるものです。無意識のうちに変化への抵抗を示す参加者を責めるのではなく、あくまでXさんに焦点を当て、Xさんをめぐる様々なことを見ていく中で、ゆるやかに視点の変換が起こるように、可能性に焦点が置けるようにと私たちは考えて、セッションを行うようにしていきます。

基本的にポジティブサポートは人々の間に発見を促し、周りの人達がXさんと一緒により豊かなXさん像を描けるように進行して行きます。それは、参加者がそのXさんをよりよく知りたいという共通の望みを持っているからこそ、発展的に動きだす土台ができていくのでしょう。そして、その望みが参加者自身の変化に対する抵抗感を超えた時に、ポジティブサポートが持つ本来の力を発揮して、さまざまな環境に対して有効に働きだすと言えます。

（ポジティブサポート研究室主宰）

障碍を持つ幼児の保育(28)

―この子と出会ったとき―

津守　真(M)
津守　房江(F)

自分の居場所を探す

こんなに高いところを自分の居場所とするのは

F　先月号で私たちは子どもが高いところに憧れをもっていることを話し合いました。養護学校の子どもたちの中には自分の好きな居場所がとても高いところで、大人がはらはらすることがありますね。

M　始めは高いところへの憧れであっても、やがてひとりで高いところから下を観察しているのかもしれませんね。本気で自分に心をかけてくれる人が分かるのです。

F　この子たちは大人が自分をこのままで受けてれてくれるかどうか、もっと違う自分を期待しているので

はないかと敏感に感じているのでしょう。

M　以前、高いところに登るのが好きなYくんが塀の上に登って降りてこないとき、私はいろいろ試みた後、「きみは言葉は話さないけれど立派な男の子だよ」と言ったら塀の上から私の肩の上にすっと降りて来たのです。それから、私とその子は特別に親しくなりました。

F　高いところに登って降りてこない子どもも、大人が見方を変える子どもの気持ちが変わって、塀の上から降りてくるのですね。

M　子どもの行動を関係の表現と考えて、自分の思い方や考え方を変えることは、結果的に子どもを変えることになるのです。

『居場所』について
考えさせられた子どものこと

M　この夏の研究会（和歌山表現保育の会・会長武田彰子先生）で語られた幼稚園の年少組の三歳の男の子も自分の存在の場が育っていない子のように思いました。

座布団を持って登園し、家に帰るときには毎日持って帰らずにはいられない。園で遊んでいるときも持っていました。

F　好きな縫いぐるみとかタオルを持ってくる子はしばしば見られますからそれと同じで、珍しい出来事ではないかもしれませんが、誰もが心を打たれたのはあの子の表情でしょう。

M　そう、そして表情の変化です。

私はあのビデオを家で研究会の前に見ましたが、その子についてのコメントはいっさい読みませんでした。でも、あのように表情が変化するにはきっとこの

子のことをしっかり受けとめる保育者がいたからだろうと思いました。

F　実は私はコメントを読んでいました。ですからあの男の子が三歳児の中でも三月末の生まれで幼いこと、下に赤ちゃんが生まれたこと、家ではビデオを繰り返し見ていたことなどが分かっていました。それでもあの呆然としたような表情は存在感のない状態の子どもではないかと思いました。座布団を持っていることもその証拠と思えました。

保育者は子どもが存在感を持つことにどのようにかかわれるか

F　あの研究会のビデオは三歳の二学期になってからのものですが、入園したころほとんど一学期間泣きとうしたということが話されました。担任の先生が抱っこをしていたからビデオを撮る余裕もなかったでしょう。そんな間もお母さんの縫った座布団を手放さなかったと言います。どうなるか先が分からないまま持ちこたえるのは大変なことです。大声で泣く子を先生が抱いてどうしていいか分からないような様子でいると、周囲の先生たちはもっと違うやり方があるのじゃないかと考えたり、この子は自閉症ではないかなど、みんなの中に心配や憶測が出てくるのが普通かと思うのです。

M　目線が合わないことや、他の人と関係なくビデオのヒーローのまねをして独り言をブツブツ言っていることなどから、自閉症と考えられることもあったでしょうが、ビデオを見て私はそうは思いませんでした。入園後の一学期その子が自分の違和感や不安感を、それだけ泣くという行為で表現できることに気が付くと、始めは重要視していなかったが、泣くことと抱かれることがとても大切なことに感じられました。

年少組の三学期の始まる日、長い時間かかって椅子に座布団をつけていましたね。椅子を動かして何とか座布団のゴムが椅子の背に引っ掛かるようにと、本当に苦心していました。そのことをやり終えることと、

自分の居場所をきめて自分の心のありかをしっかりつなぎとめることとが重なってたように見えましたよ。

F　それからですね、担任の先生と上着のボタンをとめるとかとめないとかでふざけっこをしたり、友達に誘われてやっと手をつなぐことも出てきました。

M　私は初め、担任がビデオを撮るのはどうかと思いましたが、ビデオを向けられているのを、この子が嬉しく思っていて、友達とのふざけっこが始まったことが分かりました。

F　そうですね、このビデオはそういう効果がありましたね。

心の拠り所としての居場所

M　『居場所』というのは単なる物理的空間とは違いますよ。人が生きる空間です。守られて安心できる空間、一人でいることも人と交わることもできる。自分から出て行ってまた戻ることができる場所です。

そこにいる人を信頼できるとき、自分の存在が確かにされるのです。その中で子どもは成長することができるのです。

F　ああなるほど、成長することは新しい自分自身になることとも言えますから、心の拠り所がなければ不安が大きくて、いつまでも赤ちゃんでいたくなりますね。

私はバシュラールのいう『幸福な空間』という言葉や考え方が好きなんです。

その感覚を家庭でも、幼稚園や保育所でもつくりだすことができたらと思ってきました。守られた安心感と、ここではありのままの自分を出していられる。ありのままの自分は変化することも出来るのですね。

M　研究会のための冊子には担任の先生たちだけでなく、園長先生初めいろいろな先生がこの子とのかかわりを書いていますね。園の中ではどこへいっても温かな目を感じながら動けることは子どもたちと先生たち

にとって素敵なことですね。

F　今年の六月になって年長組になったこの子が、先生とやまももの木を見にいつて、実を取って食べたり、友達にもはさみで切って分けてあげたり、その途中でアジサイの花についておしゃべりしたりしているのが何とも言えなく自然で好ましい場面だと思いました。そんなことができる庭先があることが、幼い子どもの生きる場所として最もふさわしいと思うのです。

M　そのことは障碍を持つ子どもについても同じですね。広い校庭だけでなく、自然をたのしむ庭先があることが存在感を養う場となるでしょう。

子どもの危機への大人たちのまなざし

M　いつも言っているように、そこが自分の場所であるという存在の確かさは人間成長の基盤です。守られた内側の空間があること、日常いっしょに生活する人が自分を信頼してくれていることが、子どもの存在の確かさを作ります。それがないとき雲の中を歩くように心の拠り所がなくなって存在の危機になります。

F　子どもが家庭の中で存在の危機になるのは、引っ越しなどで自分の生活の場が失われたように感じられたときと、下に赤ちゃんが生まれたときだと思います。自分のものだと思っていた母親の膝を赤ちゃんに取られることは昔からあることです。そのことが現代では子どもの存在感の危機を招くのは、上の子を大人たちが慰め、豊かな自然に気持ちを向けたりすることよりも、ビデオなどを見せて子育てを楽にしようとする考えがあるからのように思います。

M　それぞれどの家庭も人生のステップで困難がありますから、現代の家庭だけにそれを負わせることは出来ません。幼稚園や保育園の細やかな保育の中での支えがどんなに大切かを考えさせられました。

ブレント地域の夏休みのプレイスキーム

ダーリンプル　規子

七月中旬、ほとんどの学校が今年一年の授業をすべて終え、来年からの新しい学期を前に夏休みに入った。その夏休み等の長期の休みに忙しくなるのが、アウト・オブ・スクールの活動を支えているチャリティーグループのブレントプレイアソシエイションである。このグループはブレント地域の公的な部署―チルドレンプレイサービス―と連携しながら、学期中は、学童（アフタースクールクラブ）を行なっている各クラブに経営のアドバイスや活動のサポートなどを提供しているが、長期の休みになると、三時間ほどの短時間の学童とは違って、彼らの傘下にあるプレイスキームに通ってくる子どもの登録からこのチャリティーグループが引き受け、ブレント地区に広がる全てのプレイスキームの合同活動なども企画したりするので、特に大忙しである。

ホリデイ・プレイスキーム

十年ほど前は、自由にどんな子どもも出入りできる「子どもの遊び場」だったようだが、現在は、登録制・有料制になっている。

ブレントプレイアソシエイション自体は、四つのメインのスキームの他、三つの障碍児のためのスキーム、一つの問題行動を起こす子どものためのスキーム、そして一つのある会社の子どものためのスキームを抱えている。そして、ブレント地域には、それ以外に二十ほどの大小のボランティアグループ―宗教によるもの、人種によるもの等―によるスキームがあちこちで活動している。

スキームに参加できる子どもの年齢は、基本的には四歳から十一歳のどこかの学校に所属している子どもたちで、スキームの大きさは、場所の広さにもよるが、大体子どもを五十人くらいから八十人くらいまで受け入れることができる。ただし、小さい所は三十人程度の所もあるようで、また、障碍児のスキームは、それぞれが二十人定員であった。スタッフは、子ども十人に対して、一人くらいの割合で、たとえば、私が一日活動に参加させてもらったスキームはスタッフ十人、子どもが八十人弱で一日を過ごしていた。

時間は、八時から六時が普通だが、スキームによっては十時から三時までという所もある。夏休み等の長期の休みのみ開かれている所もあれば、普段は学童として活動している所がそのまま継続して、一日の活動を行なう所もある。料金は、一日十三ポンドから十五ポンド（現在の日本円にして約三千円）が普通だが、ボランティアグループのスキームには、一日二ポンド（約四百円）という所もある。働いている親は行政にいくらかの援助金を申請することができる。ただし、その政策では、働いていない親の子どもが置き去りにされかねないので、賛

否両論あるようである。

各スキームは定員制のため先着順だが、ブレント地域北部の方が生活が安定している人が多く住んでいて、そこのスキームがいっぱいになって南部を勧められても、行きたがらない人が多いとのことである。それは、自分の子どもへの影響を考えてのことであろうが、プレイアソシエイションのスタッフは、今は南部もずいぶんと変わってきているが、昔の評判がそのまま残っているからそれを変えるのはなかなか難しいと残念がっている。

親が直接申し込む子どもの他に、ソーシャルワーカーから頼まれるケースもかなりある。移民の子ども、虐待児、シングルマザーで子どもも多くいて働きに行けないケース、この機会に障碍児の自分の子どもとのふれあいを深めるために、他の子どもをスキームに預ける等、スキームに来る目的はさまざまである。ただし、ソーシャルワーカーから回ってきたケースの子どもは、何らかのスペシャルケアが必要な子どもが多く、十人の子どもに対し一人というスタッフ体制では、受け入れが難しいというのが本音のようだが、現状の中でどこかが受け皿とならないと行き場がなくなる子どもたちのために、プレイアソシエイションが担当している四つのメインのスキームにはそれぞれに約七人の子どもがソーシャルワーカーをとおして通ってきている。

活動は、基本的にはそれぞれのスキームのスケジュールによるのだが、週に一度は合同の催し物―サッカー、ラウンダー（ソフトボールのようなもの）、ゴーカートレース、そして遊園地への遠足―が企画されている。

オリバーゴールドスミス・プレイスキーム

私が訪れたプレイスキームは学期中は学童を行なっている、つまり一年中活動を行なっている所で、ブレントプレイアソシエイションのメインの四つのスキームのうちの一つである。スーパーバイザー（現場の総括責任者）は黒人の女性で、チャイルドマインダーとか、クレシュ（乳児の面倒を見る所）等のチャイルドケアの仕事にも長年携わってきた人であった。出会った時に、日本

▲オリバーゴールドスミス・プレイスキーム

で出会った保育者の人たちと似た雰囲気をもっていると感じたが、実際スキームに流れる雰囲気も、子どもの年齢が幼稚園等の子どもより上であったり、活動もダイナミックであるにもかかわらず、私が慣れ親しんだものと似ているという印象を持った。

他のスタッフは、学童の時にも働いている常勤のスタッフ（黒人一人、白人二人、皆女性）とホリデイ・プレイスキームのための臨時のスタッフ（黒人男性一人・女性一人、白人男性一人、インド人女性一人）である。常勤のスタッフの一人は、昔はオフィスで仕事をしていたが、この仕事に就いたら前の仕事には戻れないね、と私に話してくれ、自分たちのスキームをとても誇りに思っているようであった。臨時のスタッフの人たちの経歴もさまざまで、普段は建築関係の仕事をしているが、長期の休みのみ、自分のリフレッシュもかねて何年もスキームを手伝っているという人や、子ども時代にスキームに通っていた人が今は学生で手伝いに来ている人、学校でアシスタントティーチャーをしていて現在正規の先

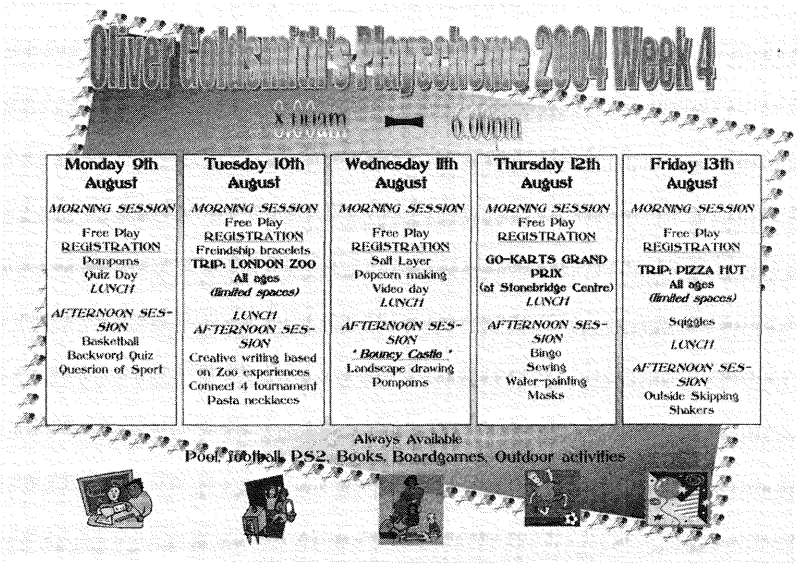
生になる勉強をしている人等、さまざまな年齢、職種の人がいた。通ってきている子どもは、ブレント地域の北部のせいか、思ったより白人の子どもも多かったが、インド人もかなりいて、あとは黒人で、中国人も数人見られた。

スキームは五週間にわたり、毎週大まかなスケジュールがたてられていて、どこかへ出かける予定（有料のものもある）が入っているときは親への手紙で希望者を募り、スタッフは外出組とスキームの場所に残る組に分かれて子どもの面倒を見るようである。

小学校の食堂の二部屋がスキームの主な活動場所だが、小学校の校庭も利用していて、そこには、広い運動場の他に、遊具等が置いてある小さい運動場、芝生や木陰のあるちょっとした広場のような場所もあって、それぞれに自由に楽しんで遊んでいる姿が印象的であった。

プレイスキームでのある一日

朝八時、スキームの部屋の鍵が開く。八時から十字の



▲スケジュール表

間に、子どもたちが親に連れられて、あるいは自分たちで、スキームへやってくる。朝ごはんを食べていない子は、スタッフがトーストを作ってあげたりしている。他の子どもたちは、何で遊ぼうかと部屋の中に広がっていく。ボードゲーム、ミニチュアのサッカーゲームやビリヤードをする子、お絵かきや切り絵・貼り絵等を楽しんでいる子、本を読んでいる子、キーボードの演奏をしている子、テレビを見ている子などさまざまである。年齢の幅も広く、四歳の子が親から離れがたかったりすると、年長の子どもたちがその子の面倒を一生懸命みたりするシーンも見られた。十時になると、スーパーバイザーが子どもたちを一つの部屋に集め、出席をとり、今日の注意事項等を述べ、再び、三々五々と散らばっていく。今度は、外でも遊べるので、多くの子どもたちは、運動場に出て行く。ボールゲームやバスケットボール、クリケットをする子、ままごとやお母さんごっこのようなことをしている子らが、スタッフとの関わりも楽しみながら遊んでいる。部屋の中ではある一角で、スタッフの一人が子どもたちにTシャツ染めを教えている。そのうちに十二時になり、スタッフによって準備されたテーブルの所に座って、お昼ごはんを食べる。子どもたちは食事が終わると、また三々五々と遊びへ散らばっていく。スタッフは、テーブルを動かし、掃除をし、また、ビリヤードの台等を元に戻している。宿題をやっている子が目に付かなかったのが不思議だったが、学年の切り替えの休みだから、ほとんど宿題がないとのこと、日本での春休みを思い出した。三時くらいからまた少しずつ、迎えに来る親の姿が見えてくる。六時には、ほとんどのスタッフも帰宅し、スーパーバイザーともう一人のメインの人が残り、最後の子どもたちを見送る。そして、最後の仕事をして帰る。八時から六時―長い一日、本当にお疲れ様と心のそこから思いながら、私もさようならとその場を去った。

（ロンドン在住）

「伝えたい」思いと「伝えられない」もどかしさ

上坂元　絵里

新しい出会い

三歳児との出会いを控え、名簿を手書きしながら名前を一生懸命覚える。以前はもっと染み込むように覚えられたのにと思いながら。女児十人、「子」のつく名前が一人もいないことにも時代の変化を実感する。また、今年度は早生まれの子どもが少ない。身体の大きいしっかりとした人が多いのかしらなどと、あれこれ想像してみる。

入園式当日、文字とイメージだけの名前が、実際の姿を伴った〇〇さんへ変わる。保育室の入り口での出会い、靴には名字しか見えない。必死で思い出して△△くんと、声をかける。途端に、保護者からもほっとした思いが伝わってくる。

生活が始まってみると

予想に違わず、三年保育にしては落ち着いた新年度のスタートであった。朝の登園、あいさつをして、うがい・手洗いをするという生活の流れを受け入れ、ブロック・積み木・絵本といった遊具に興味を惹かれて、保育室の中ですごす。そのうち園庭へ出ることを覚え、気がつくと保育室には誰もいなくなるほど、お庭も大好きな子どもたちであった。

とはいえ、一見落ち着いたようにみえる新学期の毎日、少しずつ一人ひとりの個性が目についてくる。

A児の「泣き声」

A児は「せんせい、おはようございます」ときちんとあいさつして登園。五月のある日、降園前のひととき、絵本を見終わり「次にするのは何かしら?」とみんなに尋ねると、A児は率先して「おトイレに行きます」と答える。生活の流れを理解し、ことばにできるしっかり者の面が見られた。一方で、A児は一日の生活の中で何度も泣く。天井を仰いで、からだ中で不満を表すという泣き方をする。

例えばS達が井形ブロックをつなげて床に並べて遊んでいるといった場面。

A児は何も言わずブロックを取る。A「だめ!」取られたSはそれを取り返そうとする。(A児、泣き出す)

保育者「あなたも使いたかったの? これはSちゃんが作ったの。Sちゃんが作っているのを取ろうとしたからね」(A児は泣き続ける)

保育者「Aちゃん、泣いているけど、Sちゃんも悲しいのよ。壊れちゃって」

A児は泣き続け、部屋中にAの泣き声が響く。保育者は他の子どもの要求にも対応しなければなら

ず、A児はさらに大きな声で泣いている。周りにいた子どもたちが寄ってくる。ちょうど居合わせた年長児が、「ハイ」と緑のブロックをA児に渡し、頭をなでて慰めている。三歳児のB児もA児の頭をなでる。渡してもらったブロックに興味が出てきたのかA児は泣きやむ。

自分がやりたい面白そうと思ったことにはどんどん手を出し、ものへの興味が旺盛なA児、しかし、相手の思いや状況への気づきは幼い。A児を見ていると、生活の中で定番的に使うことば・耳から入って覚えていることばと、自分の思いを伝えることばの育ちはイコールではないということを再確認させられた。ここでは保育者は、相手の気持ちや状況を説明するにとどまっているが、度々起こる同様の場面で、自分の気持ちをことばで伝えられるよう、代わりにことばで表現してみたり、繰り返し働きかけている。

お友だちと一緒に座れない、並べない

入園式の日、S児は遊戯室に入るまでは落ち着いていたものの、記念写真を撮る際には嫌がり、取り押さえる保育者に対して「せんせい、きらい」と反発、初日からあまりいい関係になれなかったと、先へ向けての課題を感じてのスタートであった。翌日からは、おはようのあいさつこそ口に出してはしないものの、すんなりと母親とは別れ、ブロックなどに興味をもって遊び始める。数日後には、お庭で出会った年中さんと一緒にすごし、保育者の手を煩わせることもなく楽しくすごす。

しかし、問題は降園の時間であった。あつまりの時間に他の子どもが座っている輪の中に、自分も身を置くことがどうしてもできない。落ち着きがないというより、分かっているがしたくないという印象であった。最初のうちは、ままごとコーナーに座っ

ていても、まあそこで参加しているということで……と大目に見ていたが、保育者としても、毎日続くと、そろそろこれくらいは受け入れて欲しいと思うようになる。

椅子に座らせようとすると、完全に脱力してダランとなってしまう。保育者の動きを見ながら嬉しそうに逃げ回る。持たせたカバンはポンと投げ捨てる。一旦列についても、やはり保育室から出ずに残ってしまう。さまざまなからだの表現で、降園時の生活の流れに添うことを拒否し続ける。

玄関で待つ母親の身になると「遊んでいるときはとても楽しそうなんですが、お帰りになると……」とフォローにならない言い訳をしてみたりする。しかし、どうしてお帰りになると、S児はこんなに保育者の気を惹こうとするのだろう？　と再度考えてみたとき、保育中のS児は、こちらが想像する以上に背伸びをして頑張っていたのかと推測された。六月に入ると、S児がちょっとしたことで「せんせい。せんせい」と呼んでくることが多くなる。少しずつ保育者を頼りにすることができるようになっているのかと感じたが、S児は結局、一学期の終わりまですんなりとは帰ることができなかった。他の子どもを保護者にお渡しして急いで戻ると「せんせい、きらい。おかあさん、きらい」と突っぱねられる。ただ帰りたくないというだけではない、何かうまく表現できない思いを感じながら、どうすればもっと素直に思いが表現できるのかと考え続けた一学期であった。

先生に言えない

K児は入園当初、緊張をからだ中に漂わせながらも、母親と別れるときに泣いたり、保育者に甘えてきたりすることは殆どなく、四月のうちに一緒にすごす三人組ができた。保育室からは少し遠いブラン

コに、子どもたちだけで乗りに行くなど、自分たちで生活を始めたという印象であった。三人の中でO児は、お庭で遊ぶのが大好き。でも、K児はもう少し室内でままごとなどもしたいのでは？　と感じて、「Kちゃん、お庭行きたいの？　お部屋でおままごともできるのよ？」と尋ねてみる。K「本当は、疲れちゃったから……」と、お部屋で遊びたいとストレートには言えない。

五月のある日、お山でK児を見かける。しょんぼりと一人でいたので、何かあったのかなと思い近づくと、さっと逃げる。やっぱりと思い穏やかに聞き出そうとするが、最後まで何があったのか言えない。

思いを「伝えることば」を育むために

三つのお弁当箱にごちそうをつめていたA児、Y児が「僕のお弁当箱がない」と保育者に訴えかける。「ひとつ貸してって言ったら？」と保育者は答える。そのことばを聞いたか聞かずにか、Y児はA児の手元のお弁当箱を三つとも持っていこうとする。A児は、泣きながら「Aちゃんのがなくなっちゃう！」と叫ぶ。保育者は「Aちゃん、よく（ことばにして）言えたね」とA児の小さな変化を嬉しく思いながら声をかける。そんな風に、今までとはほんの少し、でも確かに違うことばを、子どもたちが使うことができた瞬間を受け止め、認めていくことも保育者の大切な役割のひとつかと思う。

五月、二回目のお誕生会、おやつを食べる席になかなかつくことができないS児。実習生が「ちゃんと座らないとおやつ食べられないよ」と困りながら発したひとこと。結局、S児は椅子には座ったが、

ひと口もおやつを口にしなかった。大人は物の例えで言ったつもりのことばでも、子どもは本当に真に受け止める。迂闊に物は言えないと改めて感じさせられた出来事であった。

まだわずか四年の人生しか生きていない子どもたち、テレビその他の身近な環境から取り込んだ一見豊かな言語能力に、ふと大人と会話しているような錯覚に陥ることもしばしばである。幼稚園の生活が始まり、子どもたちは、友だちや保育者と出会い、さまざまなことを感じ、「伝えたい」思いをたくさんもつ。けれども、なかなか「伝えられない」もどかしさを感じ、葛藤していることが、さまざまな場面で伝わってくる。今までと違って、すぐに助け船を出してくれる親もそばにはいない。三歳児の子どもたちを見ていると、「伝えたい」「うまく伝えられない」という悶々とした思いをもつことの大切さをひしひしと感じさせられる。そして、友だちや保育者との関わりの一つひとつを通して、生きた伝えることばを豊かにしていかれるようにと強く思う。

S児がすんなりとお帰りに座れたある日、保育者が「きょうは、みんなお支度がすっとできました」と声をかけると、E児「Sくん、かっこいい！」と言う。いつも座れないSに対するE児なりの精一杯の表現だったと思う。

教師という立場に身を置いていると、なにか教師臭い、あるいは教師らしい物の言い方が染みついてしまうのを感じる。それだけに、子どもたちの必死の思いで表現することばに、はっとさせられることも多い。私自身、思いを伝える「ことば」で語りかけられる者でありたいと改めて思う。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

葉っぱの力(3)

群馬　直美

闘う。
人生は闘いに満ちている。
闘いながら人は大きくなり、
夢を夢で終わらせない力を身につけてゆく。
試練や困難は、神さまからのプレゼント。
夢の扉を開ける鍵……。

オバケテレビ

実はここ十数年、ちょっと怖い生活をしている。
自宅のテレビが、ひとりでに点くのだ。
帰宅すると、誰もいない暗い部屋で、テレビが点いている。相当前から点いていたのか、部屋はほんのり

暖かい。誰かが、なごんでいたような暖かさ。

留守中何者かが入り込んで、わたしの帰宅を知り、逃げ出したのか。目に見えないものがまだ居座って、テレビを楽しんでいるような気もする。

朝消し忘れたのだ、と思い受け流していたが、何度も続く。

テレビは人に見られてなんぼの代物。

そのテレビが点いている、イコール、誰かがいるということ。でも誰もいない……。

オバケがいるんだろうか、家には……。

オバケテレビはどんどん調子よくなり（？）、わたしがいるときでも平気で点くようになった。

寝ていると夜更け過ぎにいきなり点く。怖くて布団をかぶって寝た。主電源を切っても点く。コードを抜いたら、さすがに点かなくなった。

人と同じくモノもなにかを語りかけているのだろうか？　だとしたらオバケテレビは、なにを言っているのか？。

オバケアトリエ・コミュニケーション

家もその住人に向かって、なにかを言っているのだ

ろうか？　というのも、わたしのアトリエ……。

倉庫の二階に間借りしたアトリエとの付き合いも、かれこれ二十年になる。

当初、このアトリエ、昼でも夜でも大きく軋んだ。古い家屋がミシッという、あれ。訪れた友人たちも「いったい、これはなにごと？」と青ざめてしまうくらい。

深夜、ひとりこつこつ制作していると突然ミシッ。縦長三十坪のアトリエの遠くのほうが軋みだし、だんだん近づいて来る……怖くなって、すぐに自宅に逃げ帰った。

……ああ、今日もアトリエに負けた！

こんな格闘を繰り返しながら、日々制作に励んだ。四六時中、アトリエはミシミシいっていた。そのうち度胸が据わり、そんな軋みも屁の河童になった。

ようやく創作の指針が、はっきりしてきたとき、本当に不思議なことだけど、アトリエの軋みは、ぴたりと鎮まった。

あのとてつもない軋みは、なんだったのか？

家もまた、人が住んでなんぼの代物。

新しい家でも人が住んでいないと、年を取るのが早いのだそうだ。だから、例え人が住んでいなくても、定期的に窓を開けて、外の風を入れてやる必要がある。

アトリエは、わたしが毎日通ったお陰で、若返り軋まなくなった。そしてまた、アトリエは軋みながら、わたしを鍛えてくれていた。

「そんなにヨワッチカッタラ、世の中渡っていけないぞ！　ミシッ！　そんな絵を描いていていいのか！　ミシッミシッ！」

持ちつ持たれつの、アトリエとわたしのコミュニケーション。

浮浪葉

こんなアトリエだけど、いろんな人が訪ねて来た。

一番記憶に残っているのは……やはり、あの人だ。

嵐の晩にひょっこり来た人。

◇

突如現れた大天使が、マリアさまに言った。

「怖がることはない」

有名な受胎告知は、この言葉から始まる。

わたしは、キリスト教関係の出版社からの依頼で、クリスマスカードの絵を描いていた。描きながら、大天使の姿を想像した。

背中に巨大な羽の生えた人間……。

アトリエの屋根の隙間から、よく小さな鳥が入り込んでは大騒動になっていたので、羽ばたきの音の強烈さは、身をもって知っていた。それが、天使の大きな羽ともなれば……！

外は暗く風が強まり、窓ガラスをガタガタ震わす。

半分開いたシャッターから外に出ようとしたそのとき、か細い人影が階段を上がってきた。

ぼさぼさの髪を固まらせ、黒々と垢にまみれた、浮浪者のおばさん！

街角で奇声を発し爆発するのを、わたしは何度も目撃していた。その人が今、目の前にいる！

心臓がばくばくして口から飛び出そうだった。
ぶるぶる震えながらも仁王立ちするわたしに、意外にも小さな声でつぶやき始めた。
なにを言っているのか、全くわからない。
それでも、全身を耳にして聴き入っていると、状況がはっきり見えてきた。

通りで爆発していたのは、確かにこの人だったかもしれないが、今のこの人じゃない。
今、この人は震える魂で、わたしに一生懸命話している。なんとかわたしとコミュニケーションをとりたいと、必死になっている……。
この人を理解したい！　心底、思った。
なんとか、コミュニケートしたい！
すると、垢まみれの浮浪者のおばさんが、とてもきれいな人に見えてきた。くっきりとした目鼻立ち。きちんとお風呂に入り、垢を落として身なりを整えれば、かなりの美人だ。こんなにきれいな人が、どうしてここまで身を落とすことになったのか……。
心が痛くなった。抱きしめたい気持ちでいっぱいになった。

「おばさんは、女優さんだったの？」
思わず口をついて出た言葉に、自分でもびっくりした。おばさんは、つぶやくのをやめて、わたしを見つめた。
「だって、ブリジット・バルドーみたいにきれいだ！」
「ああ…神さまぁ…」
そして、おいおい泣き出した。
おばさんの口からこぼれ落ちた言葉に、今、ここに、わたしたちの頭上に、神さまがいる！　と思った。おばさんの心の叫びを聴いた気がした。
わたしも泣いた。

ふたり手を取り合って泣いた。

おばさんの手は、砂でじゃりじゃりしていた。

薄汚れた木綿の花柄ノースリーブ。赤茶のだらだらっと裾の長いスカート。腰に荒縄を巻いたおばさんは、ノースリーブの袖口に手を突っ込むと、二本の瓶ビールを取り出した。

服は、カバンにもなっていたのだ！

「これ、飲んで」

びっくりするわたしを尻目に、

「また来るから。今度は、友だち大勢、連れて来るから」

嵐の気配が強まる夜の中に、何度もお辞儀をしながら、消えていった。

◇◇

その後、アトリエに友だち大勢連れて、おばさんは来ることもなかった。それどころか、その日を境に、この街でその人の姿を見かけることもなかった……

と、ある人に話すと、

「かわいそうに。アトリエに泊めてあげなかったから、おばさん死んじゃったんだね」

と言われた！

そうじゃない。おばさんは、今もどこかで生きてい

る。垢を落としきれいになっちゃったから、気づかないだけなのだ。ひょっとしたら、女優業に戻り、テレビに出ているかもしれない。

夢を見た。きれいになったおばさんが、生き生きと暮らしている夢……。

◇◇◇

オバケテレビのその後。

ビデオが壊れ修理屋さんに来てもらったとき、一緒に見てもらったら、部品がひとつ壊れていたせいだった。

オバケテレビは、「ボク、コワレテマスッ」て、訴え続けていただけだったのか！

でも、修理したばかりだというのに、また自動的に点くようになった。

これはやっぱり、家にオバケがいるせいだ！

あのおばさんも、本当の本当は、大天使だったのかもしれない……。

◇◇◇◇

怖かったけど、心と心が通じ合った、あの一瞬。

ボロボロの魂の輝きが、今もわたしの心を暖め続けてくれている。

コワガルコトハナイ……

すべては、ここから始まるのかも。

余談だけど、その後訪れたルーマニアで、ジプシーの子どもたちがあのおばさんと同じように、〝服カバン〟方式を採用していた。

国境を越え、人の知恵も万国共通！

森羅万象、

生きとし生けるもののうちに、

等しく宿る魂の輝き。

☆本文中の絵は筆者による。

（葉画家）

幼児の教育　第一〇三巻（平成十六年）　総目録

◇第一号

巻頭言
威ありて　猛からず　森下はるみ
日本における幼稚園の成立　湯川嘉津美
ある日
「遊び」雑感　その三　吉村真理子
退職園長による子育て塾(1)　戎　喜久恵
平和の種子を育てよう―荘司雅子先生の生涯を思う―　津守　真
荘司雅子先生葬儀式辞
―平和教育の源流―　森澤　一由
M男との関わりを通して感じたこと　大久保裕美
ニューヨークに住む日本の子どもたち(2)　鍋島　恵美
手づくり活動の楽しさすばらしさ(10)　浜本　昌宏
TO・NI・KARAひろば　その十一　嶺村　法子
子どもの本から　異文化をつなぐ子どもたち　大沢　啓子

◇第二号

巻頭言　幼児教育をめぐる最近の状況を憂う　小川　博久
障碍をもつ幼児の保育(18)　聴くことを考える　津守　真・津守　房江
特集〈脚・足〉
足を鍛える　山本東次郎
「初めの一歩」　田辺　敦子
歩く―その技　原田奈名子
ウサギの後ろ足はなぜ長い　中川美穂子
足がはやいのもよしあし　村田　容常
ある日
ポジティブサポートの世界(6)　村田　愛
モスレムの子どもたちの今　小林　美実
手づくり活動の楽しさすばらしさ(11)　浜本　昌宏
つながりを生み出すからだ・場　伊集院理子

◇第三号

巻頭言　昭和二十年以降の幼稚園・保育所の一元化論をめぐって　岡田　正章
せつな系植物楽　植物ぽろぽろ
第四葉　ヒバ　群馬　直美
「遊び」雑感　その四　吉村真理子
傘のぶつかり合いに思う　酒井　幸子
ニューヨークに住む日本の子どもたち(3)　鍋島　恵美
ある日
障碍をもつ幼児の保育(19)　音に敏感な子ども　津守　真・津守　房江
手づくり活動の楽しさすばらしさ(12)　浜本　昌宏
退職園長による子育て塾(2)　戎　喜久恵
ブレントでの障碍児へのサポート　清原　規子
TO・NI・KARAひろば　その十二　嶺村　法子

◇第四号

巻頭言　手足の動きのしなやかさ　牧野カツコ

なぜ　今　保育所最低基準改善が必要なのか　村山　祐一

ある日

新しい生活の始まりに寄せて　田代　和美

トルコの幼児教育について　加藤　定夫

障碍をもつ幼児の保育(20)

子どもには大人の話が聞こえている　津守　真・津守　房江

乳児クラスの保育より(1)　田辺　敦子

世界の子育て事情(1)　ニュージーランド　池本　美香

昭和戦中期の保育問題研究会の活動(1)　松本　園子

はれ！　ときどき・・・その①　さとうひろこ

山すべり　吉岡　晶子

◇第五号

巻頭言　多面的でダイナミックな子どもの理解の素材を求めて　大戸美也子

障碍をもつ幼児の保育(21)

聴くこと・子どもの成長の中で　津守　真・津守　房江

子どもと出会う(7)　岩田　純一

「遊び」雑感　その五　吉村真理子

はれ！　ときどき・・・その②　さとうひろこ

特集〈眼・目〉

科学者の眼・芸術家の目　渡辺　純一

瞬き　尾形　節子

冬芽の涙　高柳　芳恵

見る力　北島　尚志

退職園長による子育て塾(3)　戎　喜久恵

「漠然とした迷い」に向き合うこと　金井　彩

◇第六号

巻頭言　「午前の保育」と「午後の保育」　無藤　隆

世界の子育て事情(2)　カナダ　福川　須美

昭和戦中期の保育問題研究会の活動(2)　松本　園子

乳児クラスの保育より(2)　田辺　敦子

障碍をもつ幼児の保育(22)

言葉がなくても思いは通じる　津守　真・津守　房江

はれ！　ときどき・・・その③　さとうひろこ

ある日

葉っぱの力(1)　群馬　直美

ポジティブサポートの世界(7)　村田　愛

ブレントでの障碍児へのサポート(2)　清原　規子

かみさまからのおくりもの　佐藤　寛子

◇第七号

巻頭言　凛として―日々の積み重ねが育てる自信―　関口はつ江

特集〈耳〉

みみ　田村久美子

「きくこと」と「わかること」　吉川はる奈

「耳」をめぐって　村石理恵子

言葉をつかむ　気持ちをつかむ　聴き取る力　山梨八重子

「遊び」雑感　その六　吉村真理子

退職園長による子育て塾(4)　戎　喜久惠
障碍をもつ幼児の保育(23)　遊びが伝えて
くれること　津守　真・津守　房江
乳幼児の「食」を考える(2)　小川　清実
子どもと出会う(8)、　岩田　純一
保育者として……育つこと・育てること
矢萩　恭子
はれ！　ときどき・・・その④
さとうひろこ

◇第八号
巻頭言　幼児期にはぐくまれる母語の土
台　耳のことば・目の言葉　内田　伸子
卒業する子どもたちの姿から想うこと
田代　和美
世界の子育て事情(3)　デンマーク
山本　真実
特集〈緑蔭図書紹介〉
別の見方で自己を知る　平澤　伸一
絵本が描く心の世界　井原　成男
子どもの時　河野　優子
自己を物語る『きよしこ』『拡散』を
読む　浜口　順子

昭和戦中期の保育問題研究会の活動(3)
松本　園子
ポジティブサポートの世界(8)　村田　愛
障碍をもつ幼児の保育(24)　水―なぜこん
なにも水遊びが好きなのか
津守　真・津守　房江
乳児クラスの保育より(3)　田辺　敦子
はれ！　ときどき・・・その⑤
さとうひろこ

◇第九号
「雑」を見直す　浜口　順子
子どもと出会う(9)　岩田　純一
劇を見る子どもたち　小林　美実
子どもの理解を深めるために　清原　規子
葉っぱの力(2)　群馬　直美
退職園長による子育て塾(5)　戎　喜久惠
思い出を物語る、語りなおす　藤田　宗和
障碍をもつ幼児の保育(25)
水が大好きな子の『お魚物語』
津守　真・津守　房江
話したくなるとき　渡邉　満美

はれ！　ときどき・・・その⑥
さとうひろこ

◇第十号
巻頭言　もうひとつの子育て支援
友定　啓子
特集〈背〉
集団主義と自己責任　波多野　純
背中で、背中から、感じること
槙谷　厚子
介護の世界で働くようになった私
小林　瑠以
背を見て育つ関係
石塚　諭・久保田　哲司
障碍をもつ幼児の保育(26)　大気・天への
憧れ　津守　真・津守　房江
世界の子育て事情(4)　フランスの子育ち
支援・子育て支援　星　三和子
ポジティブサポートの世界(9)　村田　愛
乳児クラスの保育より(4)　田辺　敦子
昭和戦中期の保育問題研究会の活動(4)
松本　園子

「はじめの一歩」　清宮　聡子
はれ！　ときどき・・・その⑦　さとうひろこ

◇第十一号
巻頭言　遊びの充実を確かなものに　河邉　貴子
退職園長による子育て塾(6)　戎　喜久惠
障碍をもつ幼児の保育(27)　高いところに登る子どもの問題　津守　真・津守　房江
コミュニケーションとしきたり　宍倉　啓子
ある日
運動と運動遊び　森　司朗
学生の心に残る保育場面　横山　洋子
子どもと出会う(10)　岩田　純一
「つながり」と「交流」　藤江　康彦
こころのつながりを大切に　前原　由紀
はれ！　ときどき・・・その⑧　さとうひろこ
保育の見直し四年目一学期　入江　礼子

◇第十二号
巻頭言「園案内」の写真は、アクセサリーなのか　大場　幸夫
昭和戦中期の保育問題研究会の活動(5)　松本　園子
はれ！　ときどき・・・その⑨　さとうひろこ
乳児クラスの保育より(5)　田辺　敦子
世界の子育て事情(5)　アメリカ合衆国　上垣内伸子
ポジティブサポートの世界(10)　村田　愛
障碍をもつ幼児の保育(28)　自分の居場所を探す　津守　真・津守　房江
ブレント地域の夏休みのプレイスキーム　ダーリンプル規子
「伝えたい」思いと「伝えられない」もどかしさ　上坂元絵里
葉っぱの力(3)　群馬　直美
幼児の教育第一〇三巻（平成十六年）総目録

幼児の教育
第一〇三巻　第十二号
（二〇〇四年十二月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十六年十二月一日
編集兼発行人　浜口順子
発行所　日本幼稚園協会
〒112―8610 東京都文京区大塚三―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108―8620 東京都港区三田五―二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113―8611 東京都文京区本駒込六―一―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―一―一九六四〇

☆本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

行事別保育のアイデアシリーズ

日々の保育にうるおいと心地よい緊張感を与えてくれる
「園行事」のアイデアを豊富に紹介する新実技シリーズ

好評発売中

行事別保育のアイデアシリーズ④
みんなでつくろう
発表会

花輪　充　著

日常の保育を発表会へと発展させていくためのユニークな脚本集。簡単なリズム遊びからミュージカルやオペレッタまで、子どもたちがふだんの遊びの延長で取り組むことができ、発表会が魅力いっぱいのものになります。「発表会まで」と、「発表会では」のアドバイスに楽譜を多数収録。

AB判　96頁　定価 2,310円（税込）

行事別保育のアイデアシリーズ⑤
みんなわくわく
クリスマス・お正月

島本一男　著

子どもが楽しみにしている行事、クリスマスとお正月をどのようにして保育の中に生かしていったらよいのか。本書は、子どもと一緒につくる製作物のアイデアやパーティーでのゲーム・出し物のアイデア、遊び歌などの事例を多数紹介しています。新しいクリスマス、お正月のヒント集です。

AB判　96頁　定価 2,310円（税込）

［既刊］好評発売中！

行事別保育のアイデア・シリーズ①
元気がいっぱい夏期保育

やまもとかつひこ監修／
関西あそび工房著
AB判　96頁
定価 2,310円（税込）

行事別保育のアイデア・シリーズ②
みんなにこにこ運動会

ワークショップりんごの木著
AB判　96頁
定価 2,310円（税込）

行事別保育のアイデア・シリーズ③
心を伝える入園式・卒園式

小林紀子編著
AB判　96頁
定価 2,310円（税込）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇三巻　第十二号　平成十六年十二月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

21世紀保育ブックス

最新刊

編集委員　森上 史朗（子どもと保育総合研究所代表）
柴崎 正行（大妻女子大学教授）
柏女 霊峰（淑徳大学教授）

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与えるシリーズ！

21世紀保育ブックス⑰

子どもの安全を考える
事故・災害の予防から危機管理まで

齋藤歓能（横浜国立大学）著

子どもの事故の実態をみながら、子どもの心身の発達と事故の関係、事故・災害の防止、不審者に対する危機管理など、理論と実際の両面から幼稚園・保育所における積極的な安全教育を提案します。

【目次から】
第１章　子どもの遊びと事故
第２章　子どもの心身の発達と事故
第３章　子どもの事故の実態
第４章　安全教育の基本
第５章　幼稚園・保育所における災害防止
第６章　遊具事故の防止
第７章　登降園時における交通事故の防止
第８章　幼稚園・保育所における不審者に対する危機管理
終　章　安全教育のポイント

B6判　200頁　定価1,260円（税込）

既刊本

①新しい教育要領・保育指針のすべて	森上史朗　著
②新時代の保育サービス	柏女霊峰・山本真実　共著
③カウンセリングマインドの探究	柴崎正行・田代和美　共著
④子ども虐待の理解と対応	庄司順一　著
⑤知的好奇心を育てる保育	無藤　隆　著
⑥保育者の「出番」を考える	吉村真理子　著
⑦地方自治体の保育への取り組み	山本真実・尾木まり　共著
⑧乳幼児期の「心の教育」を考える	阿部和子　著
⑨自由保育とは何か	立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子　共著
⑩保育者が出会う発達問題	大場幸夫・前原　寛　共著
⑪保護者の要望をどう受けとめるか	小笠原文孝　著
⑫保育所と幼稚園～統合の試みを探る	吉田正幸　著
⑬子どもの健康を考える	巷野悟郎　著
⑭「わたしの世界」から「わたしたちの世界」へ	今井和子・神長美津子　共著
⑮21世紀の子育て支援・家庭支援	伊志嶺美津子・新澤誠治　共著
⑯保育をデザインする	戸田雅美　著

以下続刊

キンダーブックの フレーベル館

定価　五五〇円（本体五二四円）☆

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。